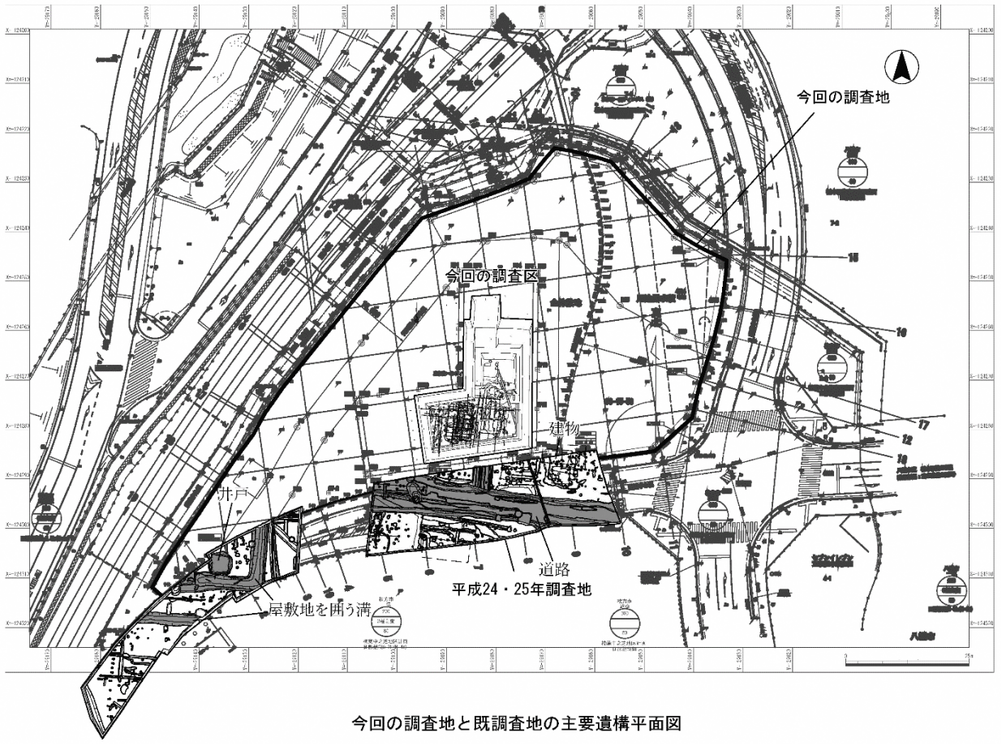
参考資料５－１

楠葉中之芝遺跡　第 98 次調査の成果

楠葉中之芝遺跡について　楠葉中之芝遺跡は、枚方市最北部に位置する古墳時代～中世の集落遺跡です。今回の調査地の南側で平成 24・25 年に実施した本発掘調査では、平安時代から室町時代にかけての道路や建物、有力者の居宅等が発見されました（下図）。今回の調査地は、その東側を山陽道が通っていたと推定され、南側には行基が建立したと伝わる久修園院がある等、古代の重要地点に位置しています。平安時代に入ると、遺跡東側の男山には石清水八幡宮が勧請され、その山麓を流れる淀川には港が整備されたと考えられています。調査地の南側で見つかった遺跡は、港町に関連するものと指摘されています。

今回の調査成果　今回の調査においても平安時代初めから室町時代初め（8 世紀末～14 世紀）頃にかけてと推定される建物、井戸、溝からなる港町の続きが発見されました（写真 1）。これらの建物柱穴等が重なり合う状況からは、建物が軒を並べて建ち並び、人口が増えて盛んであった町の様子を窺い知ることができます。この町は、平安時代初頭頃まで遡ることが明らかとなり、当時から大規模な建物が計画的に配置されていたと見られます。当地周辺の男山西麓では、この時期に桓武天皇が楠葉を平安京のための土器生産地へと開発することが既研究から知られていますが、今回の大規模な建物の出土状況からは生産地の開発に留まらず、公的な施設が港と一体となって整備されていたことを示唆する重要な発見となりました。

今後について　本発掘調査は完了しましたが、令和 9 年頃まで建設工事の立会調査は続きます。この成果は、事業者の協力を経て、発掘調査報告書として令和 10 年 3 月末に刊行する予定です。



今回の調査地と既調査地の主要遺構平面図

写真 1　平安時代から室町時代初め頃にかけての多数の建物柱穴と溝・井戸からなる宅地
（奥には石清水八幡宮本殿が所在する男山山頂を望む）

写真 2　室町時代初め頃の井戸から出土した楠葉産の瓦器羽釜と木製品